

播州



姫路支局

〒670-0921
 姫路市総町119
 姫路不動ビル内
 0792(24)5551
 F A X 0792(26)3191
 通信部
 加古川 0794(22)3345
 加西 0790(42)0337

販売店へのご用は
 赤穂 (43)5700
 加西北条 (42)2249
 販売センター (21)7177
 姫路北野 (23)2792
 龍野 (23)8513
 本太 (63)3786
 旭子 (73)7156
 畑燭 (73)6533
 広畑 (36)0401

広告のご用は
 0792(25)1037

購読お申し込みは
 0120-34-3733

身の回りになくなくてはならない生活必需品だった「マッチ」。今、家の中を見渡すと…。ロウソクや線香に火をともしず壇、非常持ち出し用のリュックの中、灰皿のかたわらくらいだろうか、マッチのありかは。あとは、飲食店辺りでもあった広告マッチが引き出しの中に転がっている程度かも。マッチを擦った経験のない子供も増えているかもしれない。

工場長五毛が胸を張る。百層離れた「南工場」からエアシューターを通して、二・二角、長さ五秒の小さな「軸木」が次々と送り込まれてくる。すでに軸木には、着火時に

播州製造業図鑑

Part 2

すっかり影の薄いマッチだが、なんとこれが播磨の主要な地場産業だという。国内産マッチの八・九割が播州産。中でもトップの製造量を誇る太子町鶴の「神戸燐寸」を訪ねた。

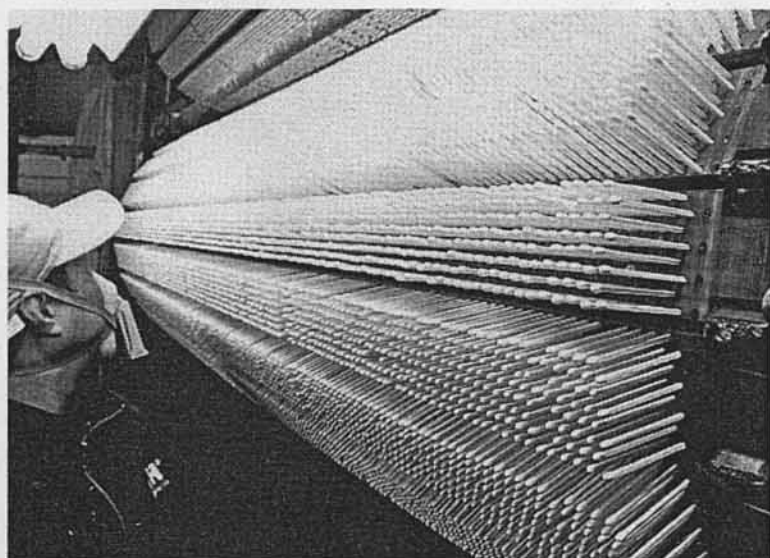
町役場の南側を通る旧国道をはさんで南北に工場が広がる。「北工場」にある建屋の中で、レトロな雰囲気漂わせる大き

燃えカスが落ちないようにする薬品が染み込んでいる。製造機のコンベアに空いた無数の穴へ、この軸木が自動的に差し込まれ、巨大な剣山のような状態で約一時間、マッチへと生まれ変わる。旅に出るのだ。

燃焼剤「パラフィン」に浸され、さらに塩素酸カリやガラス粉、ゼラチンなどが混ざった薬剤にチヨコンと付けられると、

マッチ

(神戸燐寸)



巨大な剣山!? 軸木に頭薬がつけられ、コンベアの流れに乗って乾燥されていく無数のマッチ—太子町鶴の神戸燐寸・北工場

かわいらしい頭ができあがる。そしてじっくり乾燥。夏場だと、この乾燥の前に「冷却」の一行程が加わる。

業になったのか。竹田さんの輸出には、『神戸港に近い』解説する。「明治以後、日本はという地の利があったようです。スウェーデンや米国と並ぶ世界です。また、昔はマッチ箱も木の三大マッチ生産国で、重要な輸製で、軸木などと一緒に天日干ししていったといい、「年間を通じて雨の少ない瀬戸内の気候が適していたんですね」。

オンリーワンになるまで

使い捨てライターの普及、自動点火装置のついた器具などの

「マッチの需要は今後も確実に減り続けるでしょうが、何らかの形で製造は永遠に続けたい。オンリーワンになるまで踏ん張りますよ」。一本擦ってみたマッチの残り香が、この上なく高貴に感じられた。

神戸燐寸 (太子町鶴)
 【創業】 昭和4年5月
 【主力商品】 マッチ、ポケットティッシュ
 【従業員数】 80人
 【資本金】 4000万円
 【売上高】 10億円 (平成17年4月)
 【企業理念】 とともに勝つ

播磨地方が国内外に誇るオンリーワン、ナンバーワンのもので、現場を紹介する「播州製造業図鑑」。昨秋に続く第二弾として、再びさまざまな企業を訪ね、地場産業の過去・現在・未来を探る。

(小林宏之)

「社名の由来」マッチは盛んに輸出されたため、海外に名の通った貿易港「神戸港」にちなんだ。姫路市玉手での創業当時は「嵯峨山燐寸製造所」と名乗り、昭和7年に太子町鶴に進出し、12年には鶴工場に集約。戦後の23年に法人化し、「神戸燐寸」として新たなスタートを切った。

増加で、生産量は減少の一途をたどるマッチ。八十社以上あったメーカーはほとんど淘汰された。なぜ、厳しいサバイバルレースを勝ち抜けたのだろうか？ 「マッチへのこだわり、でしょうか」と竹田さん。同業他社が次々と業態転換を図っていく中、大量生産から少量多品種への態勢を整え、さまざまな素材やデザインなどの注文にも応えられる力を蓄えていった。努力の継続と技術の蓄積。これが、その後のポケットティッシュやコースターの製造につながり、近年ではバス車両のラッピングやスタジアム内の広告看板などの事業へと結実し、新たな展開もスタートしている。